

水漏れ原子炉が‘冷温停止’とは？

東京電力が「年内に冷温停止を達成できる」と記者会見し、TVはこれをろくに分析もせず大々的に報道した。「水の沸騰が抑えられ、放射性物質の飛散が停止しますよ」と遠まわしにいいたいことは一応、理科教員をしている私にもわかる。しかし、核燃料のメルトダウンによって穴だらけになった格納容器の状況と「冷温停止」とする表現する意味がさっぱりわからない。私たちが知りたいのはメルトダウンした核燃料の存在と「放射能漏れは止まったのか」ということにつきます。そこには何もふれていない。根拠が希薄な安心感を安売りしているように見える。高濃度の放射性物質に汚染された汚染水が建屋の床・地下室全体に溢れ出し、高すぎる放射線量が人が近づけないというのに、「冷温停止」といわれてもわかりに信じがたい。だからどうした？というのが正直な実感だ。聞いたこともない業界用語を発表されても意味がない。以下、ニュースと「冷温停止」にまつわる小出教授の見解をのせた。

東京電力(TEPCO)は17日、福島第1原子力発電所から飛散する放射性物質の量が、過去1か月で半減したと発表した。また、月例報告のなかで、損傷した原子炉の冷却作業も順調で、年内に「冷温停止」を達成できるとの見通しを示した。

政府との定例記者会見で、東京電力は損傷した原子炉3基の温度は100度未満まで下がったと発表。冷温停止には、現在の温度を維持することが重要要件となる。

その一方で東電は、原発付近では現在も小規模な地震が頻発していることから、依然として津波が最大のリスクであることには変わりはないと語った。【10月18日 AFP】

小出裕章助教授とジャーナリストの明石昇二郎氏との対談より

小出:「冷温停止」など、私から見るともう話にもならない。『冷温停止』というのは、もともと私たち原子力関係者の間でしか使われていなかったテクニカルターム(専門用語)ですよ。

炉心の温度が100℃を下回ったら「冷温停止した」というんです。なぜ100℃なのかといえば、100℃を下回らない限り、水が水として存在できず、蒸気になってしまうからです。ようするに、安定して原子炉を水で冷やすことができる状態を言います。

福島第一原発1号機に関しては、東京電力自身が「压力容器の底が抜けてしまっています」と言っているわけです。溶けてしまった炉心が压力容器の底から抜け落ちてしまった。そうすれば、もう压力容器の底に水は溜まらない。100℃を下回る、上回るかなんて、今や事故の収束と何の関係もなくなくなっているんですよ。底から抜け落ちた炉心が今、どこにあるかさ把握できていないんです。

底の抜けた原子炉で「冷温停止」はあり得ません。それなのに、いまだに『冷温停止』なんていうテクニカルタームを使うこと自体が、フクシマ事故のメカニズムを理解していない証拠だとも言えるでしょう。

明石:つまり大半のメディアは、東電から言われたままの話を、考えなしにそのまま流していることになりました。小出:そうです。メルトダウンが明らかになり、冷温停止なんていう概念が崩壊しているのに、東電はいまだに使っているわけですよね。技術者がそんな言葉を使うのはとても恥ずかしいことだと私は思うんです。

(別冊宝島1821号『原発の深い闇2』9~10ページより)

ある歌を連想した。名づけて「千の風(放射能)になって」!

私のお墓(格納容器)の前で、喜ばないでください
そこに私(核燃料)はいません
眠って(100℃になって)なんかいませ〜ん

千の風(放射能)に〜 千の風(放射能)になって〜
あの大きな空を
吹きわたっています〜

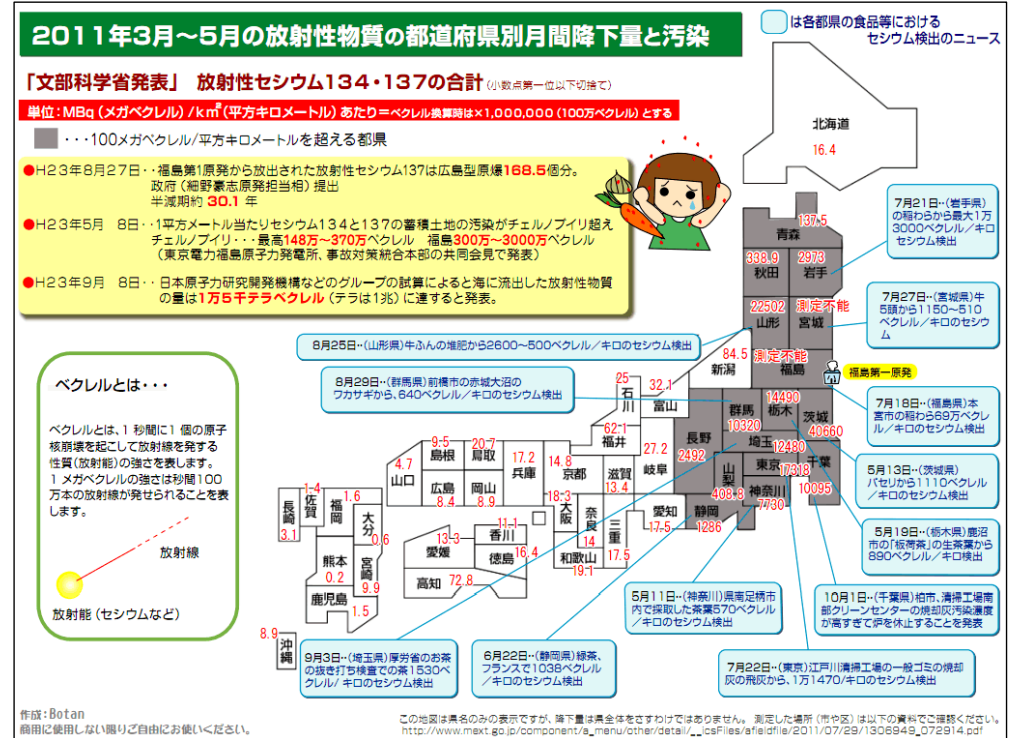
お墓といえば、福島第一原発の現場で復旧作業に当たっていた大角信勝さんが5月14日に亡くなっている(享年60)。福島原発事故処理の犠牲者第一号である。協力会社(東芝4次下請け会社)は防災申請を検討していたタイ人の未亡人に、わずか50万円の見舞金を渡し、「これで国に帰れ」と突き放したという。

「私の夫の命は、50万円なのか・・・」信勝さんの妻である大角カニカさん(53歳)は、怒りと悲しみを滲ませている。除染作業にあたる多くの労働者はこうした〜次〜次という下請け派遣会社から送り込まれている。人間を死屍累々と使い捨てながら稼働する原子力発電の実態だ。事故を起こした以上、こうした労働者を準公務員的な待遇に改善し、除染作業にあたらせるのが国家というものではないのか。かの戦争では国家のために命を捧げた犠牲者に対し、恩給を支給する制度がある。国策の原子力に尽くした犠牲者を犬死させるのなら、「靖国の神の怒り」にふれるというものだ。

EPZ(緊急時計画区域) 30km 圏でいいんですか？

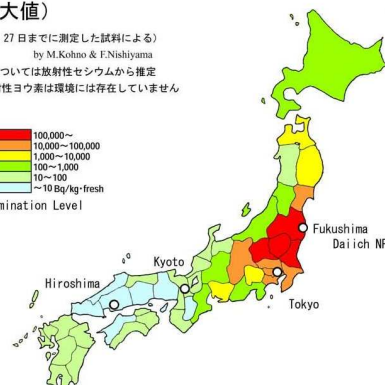
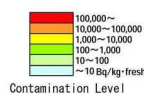
国の原子力安全委員会は20日、『防災対策を重点的に充実させるべき地域』いわゆるEPZについて、これまでの原発から最大10キロの圏内から30キロ圏内にまで広げ、50キロ圏内までをヨウ素剤などの準備区域とする方針を示した。札幌市の上田市長はこの方針に不快感を示した。そりやそうだろう。30km圏内は後志の余市町が幸うだけして入る距離だ。しかし、福島第1原発の事故では少なくとも100km圏内は高濃度の放射能で多い尽くされた。現実の教訓に学ばない緊急時計画区域を設定することに意味がないのは札幌に出発している熊だってわかる？。大都市圏をEPZに加えれば原発推進が困難になることを計算した区域設定だろう。

下図は文部科学省が発表した放射能降下量をわかりやすくしたものだ。灰色の箇所は高濃度汚染地帯であり、この地域から多くの汚染食品が見つっている。さらに下の二つの図はヨウ素とセシウムの汚染状況を松の葉から測定して推計したものだ。泊原発が同様の事故を起こせば北海道西半分はアウトだ。こりゃ熊った!



全国の松葉に含まれる放射性ヨウ素 (I-131) (推定最大値)

(2011年7月27日までに測定した試料による)
by M.Kohno & E.Nishiyama
*) 一部地域については放射性セシウムから推定
*) 現在は放射性ヨウ素は環境には存在していません



全国の松葉に含まれる放射性セシウム (推定最大値) (Cs-134 + Cs-137)

(2011年7月27日までに測定した試料による)
by M.Kohno & E.Nishiyama
*) 放射性セシウムは現在も環境に存在しています

